INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE

KUMAMOTO UNIVERSITY OF COMMERCE
KUMAMOTO JUNIOR COLLEGE

国際交流レター 第11号

本学に集う交換教授と留学生達
（1989年12月　研究棟中庭にて）

CONTENTS

国際交流雑感……2
内外に飛躍するＯＧ・ＯＢ……3
第３回大田大学校研修団熊本訪問印象記…6
交換教授姉妹校滞在印象記……9
交換留学生本学滞在印象記……11
第１回長期交換留学生報告記……13
熊本商科大学・熊本短期大学留学生会結成……16
留学生対象奨学金の枠拡大……18
ＳＥＭＩＮＡＲＳ……20
平成元年度留学生名簿……22
1989年後期国際交流 EVENTS ……23

'89. 12. 25 熊本商科大学・熊本短期大学国際交流委員会

——巻　頭　言——

国際交流雑感

国際交流委員長　清　野　　健

早いもので、国際交流委員長になって四年の歳月が経ってしまった。最初に計画されたプログラムは一応完成する事が出来たのではないかと思っている。モンタナ大学システム・私立三大学と本学との交流も順調で、七年の交流の実績を持つに至った。又その交流の中で、日米友好基金の支援で始まった四大学間交流（本学・熊本大学・モンタナ大学・モンタナ州立大学）も三年目を迎えようとしている。先日本学を訪問した日米友好基金の理事長一行がこの交流に高い評価を与えてくれたことは望外の喜びであった。教員１名・学生１名の毎年の交換は今後も滞りなく実施されて行くことであろう。

大田大学校との交流も、教員の交換レベルでは予定通り順調になされている。ただ学生の交換を如何にするかが残っており、大田大学校の準備が整えば、これ又順調にすべりだすものと確信している。深圳大学との交流は、本学より来年交換教員を送ることにより一巡したことになる。学生二名の交換は既に三回目になろうとしている。

環太平洋諸国との交流にあたって、懸案になっていたマレーシア、オーストラリアとの交流も、10月８日から10月15日の日程で、西村禮二係長との訪問でその端緒を摑めた様な気がしている。訪れたいずれの大学でも非常な好意と興味を示し、今後の交渉如何では交流が開始出来るのでないかとの感を強くしている。

相手の立場に立って、相互に有益な交流をすることが益々必要になってくる。相互主義の立場に立って、相手の立場と苦悩のわかる人材がこの交流を通じて輩出することを期待したい。

最後に、交流に際しての問題点を二、三指摘しておきたい。一つは単位の互換の問題である。相互主義の原則に従って、交換留学生の単位の問題は考えられるべきものであり、今一つ工夫がなされてしかるべきだと思っている。二つ目は、交換教員のビザの問題である。文部省の言う交換教員は４コマ以上の講義を担当することになっている。従って、少なくとも４コマの講義が出来るように当該学部で検討・調整される必要があろう。三つ目は、交換学生の派遣の資格の件である。単位互換が交換の前提条件である以上、それに応え得る学生を選抜して、送らねばならない。

交流が益々密になるに従って、交流はルティナイズされるべきであり、事大主義に拘泥すべきではない。

益々本学の交流が盛んになり、もっともっと交流の輪が拡がり、キャンパスが名実ともに国際化されることを期待したい。

内外に飛躍するＯＧ・ＯＢ

――留学体験を活かして――

城　小百合さん

経済学部経済学科２年次在学中に、第３回春期モンタナ派遣短期留学生として、本学からモンタナ州のロッキーマウンテン大学に派遣され、87年３月に卒業後、西ドイツの大学へ。今年の６月、西ドイツヘッセン州政府関係機関に就職が決まったというニュースが届いた。

やっと大学の前期が終わり、ホッとしたいところですけど、すでに私の就職先が６月中旬頃決まってしまい、８月１日から働き始めました。就職先はフランクフルトまたビースバーデン（州都）などがあるヘッセン州政府の詳しく言えば、ヘッセン州の経済・技術省・厚生省そして内務省が100％融資また監督しているヘッセン州経済開発振興公社の外国及国内企業直接投資部門に配属されました。州議会で、直接投資増加の需要に応えるため、フランクフルト空港に経済情報センター事務所を世界中の投資家のために９月から設立することが決定され、私は、おもにフランクフルト空港のこの経済情報センターで９月から働くことになります。現在のところ、ビースバーデンの本部で教育を受けています。おもに州・連邦またＥＣ単位の様々な金融優遇政策、商法・税法などを日本語・英語・ドイツ語で勉強しています。世界中の投資家を相手にするため、私と他の二人のフランクフルトに配属される語学力の範囲は、日本語・英語・ドイツ語・イタリア語・フランス語・アラビア語です。10月か11月には、この経済情報センターは、ブリュッセルと直結して、ＥＣ情報の窓口になります。９月５日にはこちらの州経済大臣を交えての記者会見がこのフランクフルト空港内の経済情報センターで行われる予定です。日本からは、日本経済新聞の池田記者とＮＨＫのテレビが取材に来られる予定です。ＮＨＫのワールド経済ニュースで５分程の放映が予定されていると聞いています。　〔８月13日付　岩野先生宛書簡より〕

最近、ニューズ・ウィークやSternなどの雑誌でも1992年までに直接投資が急速に増えている日本企業について書かれますけど、本当に、これからＥＣ経済統合がどれほど完成するのか、ＥＣ窓口にもこの事務所はなりますので、見守っていきたいと思います。日本人として、多分初めて、こちら経済省に属する機関に入社し、私自身が一番やりたかった日本と西独またＥＣの中に立って、学問的にも学ぶ機会をこの公社の中で与えられていることに本当に感謝しています。益々、ドイツ語と英語で、様々な資料を読みこなしていかなければなりませんけど、とにかく、30才までは私自身の人生の基礎を築くため、更に語学、経済学を学んでいくつもりです。
〔10月17日付　清野先生宛書簡より〕

松田　洋子さん

熊本短期大学教養科1年次在学中に、第5回春期モンタナ派遣短期留学生として、本学からモンタナ州キャロル大学に派遣され、88年3月に卒業。その後は日本航空のスチュワーデスとして活躍中。

母校を卒業して、早くも一年以上が過ぎました。私は今、スチュワーデスとして、大空を飛び続けています。毎日、空から地上を眺めていると、楽しかった短大時代のこと、生まれて初めて飛行機に乗り、アメリカへ渡った時のこと、さまざまな思い出が、鮮明に蘇ってきます。中学の頃から勉強してきたとはいえ、たどたどしい英語だけをたよりに、外国へ行って自分一人の力でどれだけのことができるかを確かめてみたいという、大きな好奇心がきっかけでした。

たった一人で見知らぬ国の未知の文化へ入っていくことは、ある意味で自分自身への挑戦でもあったと思います。そのさまざまな不安も、アメリカの大学で出会った大勢の友人達のおかげで、いつの間にか消え去っていました。彼らは正直で、素直で、独立心を持ち、とても同年代とは思えないほどしっかりした考えを持っていました。彼らと過ごした時間は短かったけれど、彼らから得た自立心と友情の深さは、今もなお私を強く支え続けてくれています。

今、この仕事をしていると、毎日さまざまな人たちとの出会いを経験することができます。それによって、今まで自分にはなかった所をたくさん吸収することができるのです。

私にとってアメリカは、人との出会いやふれあいの大切さを教えてくれました。これからも素敵な人との出会いが、私を成長させ続けてくれると信じて、大空に翔いていこうと思っております。

岩崎　千尋さん

経済学部経済学科4年次に1年間休学して一路中国へ。来年3月卒業後は熊本県庁に職員として勤務予定。

私は、昭和63年5月から平成元年4月まで中国の長春へ留学しました。

長春市は中国の東北地方に位置する吉林省の省都で、都市人口は260万人前後、第一自動車工場と長春映画製作所によって、その名を全国的に知られています。また長春には、大学や各種学校の数も多く、教育のさかんな都市ともいえるでしょう。例えば、日本語教育の水準も、全国でトップレベルにありますが、これはまた、日本とこの地との歴史の関わりを、暗に物語っているのかもしれません。また学校や銀行、一部の住居など、日本人がかつて建造したものが、現在も使用されているものもありますが、その風景を目のあたりにしたとき、思わず複雑な思いにかられます。

中国へ留学というと、「不便なところへ」と思う方も少なくないようですが、こと私の学舎であった東北師範大学においては、その心配は無用です。留学生一人一人に個室が支給され、各部屋にはそれぞれ洗面台、シャワー、トイレの設備があるなど、ちょっとしたホテルなみの装備で私たちを迎えてくれます。もっとも宿泊費もホテル以上ですが……。

長春の冬は寒く、零下25度以下になることもめずらしくありませんが、家屋の造りは堅固でスチームも完備されており、室内では、寒さに苦しめられることはありませんでした。

現在、東北師範大学には、アメリカと日本から、15名程度ずつ、約30人の留学生が訪れ、

おもに漢語（中国語）研修生として勉学に励んでいます。長春でアメリカの学生と席を並べ、中国人の先生の授業を受けるという、日本では経験できない体験は、私にとって大きな収穫の一つです。

中国の先生方とアメリカの学生と私たち日本の留学生が街の食堂でパーティーをしたとき、宴もたけなわのころ、アメリカの学生が「それではみんな、自分の国の国歌を斉唱しよう。」といいだしたときには、思わず冷や汗が出ました。

今回の留学では、中国の人々と身近に接することができただけでなく、アメリカの学生とも交流を深めることができ、中国のみならず、アメリカについても、理解を深めることができました。

同時に、日本とか中国という枠をつくらない個々の人間としての交流の大切さも痛く感じさせられました。それともう一つ、お互いに理解し、相手に理解させることも大切であることを学びました。

今回の留学で得たものを、活かすことのできる職業として、私は熊本県職の国際コースを志望し、試験に合格することができました。

今後も日本人であるという自覚を持ちながら、同時に国境をつくらない交流を深めて行こうと考える次第です。

田邉　元さん

商学部商学科４年次在学中、９月から１年間休学して、本学の姉妹大学であるモンタナ州立大学へ留学。来年３月に卒業後は肥後銀行へ就職予定。

私は昭和63年９月から10ケ月間、アメリカのモンタナ州立大学（ＭＳＵ）に田島司郎教授の勧めで私費留学生として留学した。出発前は明朗な私だったが、ＭＳＵでは全く別人であるかのように無口になってしまった。無口というよりも、正確には話すことが出来なかったのであった。

次第に友人もでき、３ケ月後にはレバノンからの留学生と２人でアパート暮らしをするまでになった。授業にも慣れ、アメリカをはじめ色々な国々の学生達と友人になり、彼らとの会話から容易に英語をとり入れることが出来た。授業は地理学、政治学、ビジネスなどを学んだ。授業中にしばしば日本について話題が上ったり、ＴＶのニュースや新聞などで毎日日本について報道され、経済大国日本の強さを改めて感じたものだった。

今年７月から本格的に就職活動に取り組み、肥後銀行に内定した。この留学が就職に対しプラスになったかわからないが、以下の事が今後の企業人として私に大きな味方となることは間違いないと思える。

まず第１に、現在日本企業の動向ならびに日本経済が国際化に対して大きな比重を置いている事である。幸いにも私はこの留学によって日本の外側から日本を見る機会を得、目のあたりにして、日米のビジネス観や経済観を対比できる機会を得ることが出来た。

第２に、留学先において言葉や文化、風習の全く違う国々の人々と生活し、色々な考え方に触れ、大きな視野で物事を観察することを知った。

このように留学を振り返って見ると、今すぐに役立つことは少ないかもしれないが、就職の面接等で、自分の考え方を率直で正直に表現出来たことが留学によって与えられた大きな利点であり、今後の企業人としての私にとって大きな財産であり、強い味方になってくれることと思っている。

第3回大田大学校研修団 熊本訪問印象記

熊本の大学印象記

大田大学校学生處長
方　康　雄

大田大学の学生と教職員を引率し、姉妹大学である熊本商大・短大を訪問したことは私の一生において記憶に残ることである。それは私の学問生活十六年目に初めてのことであり、また大学を代表したからである。

研修期間が短かったため、我々一行は日本を広く観察することはできなかったが、帰って来る時、皆は良い思い出と経験を積んだはずであろう。日本と韓国は、過去の歴史を通じて見る時、さほどの仲の良い関係ではなかった。わが国の立場から言えば、何回かの侵略と植民地化された経験のため、悪いイメージであった。これに対する表現が“近くて遠い国”である。しかし、過去の歴史にこだわり現実を回避するのは望ましくないし、却ってそういうことをきっかけとして良い関係を作られるからである。それを「雨後地堅し」というのであろう。

熊本はあたかも韓国の一つの都市とうつった。むくげから都市周辺の雑草まで似ていた。それらになじみがあって、いつか訪ねたような錯覚をおこしたかもしれない。それに我々一行を空港から温かく迎えてくださった熊本学園側の友情溢れた歓迎が尚更その雰囲気を作ったのであろう。国際交流室の職員の方々の奉仕精神と礼儀正しさには感嘆せざるを得なかった。

熊本県はわが忠清南道と姉妹県であり、熊本県の歴史的遺物は、わが道にある百済の古都の夫余や公川のそれらと似ていた。特に熊本城と世界的名所・阿蘇山は自然の神秘と雄壮さを同時に感じさせたのである。

もちろん世界は変化しつつある。地球の時間と空間概念は段々狭くなり、一つの地球村が形成されつつある。国際化の時代、多極化の時代に共存するためにも韓・日両国の相互協力はもっと深まる必要があろう。大田大と熊本商大・短大との姉妹結縁もその実現の一つであり、両校は今後深い学問の交流があると思われる。

最後に、宮崎教授との遭遇と日本滞在中の友誼に感謝し、また、岩野・園田両学長殿のご健勝と熊本学園の極まり無き発展を祈り、他の皆様にも感謝します。

熊本の大学印象記

大田大学校電子計算科３年
金　原　範

外国研修は勿論、外国旅行も初めてである私は出発前夜なかなか寝つけなかった。そして学生代表であったため、歓迎式場でのあいさつの準備も気になった。それで、出発の数日前から姉妹校熊本商大・短大に関して調べて見たが、大した成果もなく、ただ皮層的なことしかわからないまま出発することになった。

わが一行は、日本での５泊６日の短い日程にも拘らず、「近くて遠い国」日本を新たな視角で見る機会に胸をふくらましたのである。

過去、多くの文明を韓国から学んだ日本が今では韓国を凌駕し強大国に成長した現実が少しわかったような気がする。その理由は、正確な時間観念と、相手を理解し譲歩する協調心そのものと思う。それに彼らの親切さを見ると、彼ら自身に寛大であるのではなく、他人に寛大であることがわかった。

我々韓国人は新しいものを創造する能力はあるが、日本人はそれを現実へ活用をすることを知る民族であり、また彼らの考え方は、先進国でありながら欧米人の個人主義ではなく、韓国人と同じ保守的と言えるが勤勉である思いがする。

日本の大学は教育機関としての役割、即ち人材養成ばかりではなく、発展に一層拍車をかける研究機関としての働きも遂行しているという。特異なことは、現に大学がUniversityではなくMultiversityの大学機能、すなわち現実社会に奉仕し、それに適応できる社会人を養成する実践的教育をしているという。その裏付けとして、日本の企業は、新人採用にあたって、大学成績より人間関係とサークル活動を通じての協調心を重視するということである。

上記の事実こそ、今日の日本がアメリカを押しのけて先進国の位置を確固たるものにした一つの要因ではなかろうか。

おわりに、国際化時代のなかで両姉妹校の役割が重要なこの時期、教授のみならず学生の積極的な交流によって、民間外交に寄与できる交流の幅を徐々に拡大することを誓い合ったことは今度の研修の成果と思う。

日本研修を終えて

大田大学校英文科３年
丘　美　英

大学入学後四度も休みを迎えたが、終わり頃はいつも虚無さを感じただけである。その理由は、開講を目前にしてふりかえって見ると、何の思い出もなかったからである。

しかし、今回５度目を迎えた夏休みはこれまでとは異なり一生思い出に残る経験をした。長い期間ではなかったが、海外研修で、日本の熊本への旅がそれであった。

７月５日午後、金浦空港を離れ、熊本空港に着いた。異常と感じるほど淡々であったし、空港バスで外を見てもわが国の郊外の風景を見る気分であった。熊本学園に到着、歓迎式に参席、多くの日本学生や教授と会い、彼らは親切であった。以後研修日程中、日本人より感じた共通点は陽気で親切であったという

ことである。

翌日から、日程にしたがってセミナー、学生との交流及び観光をした。しかし、日程があまり短くて行かれなかった所も多かったし、特に日本の学生とのふれ合いがあまり限定されているので多くの対話ができなかった。その点が惜しかった。可能ならば日程を少しのばし、学生との交流時間を増やしたら研修が効果的ではないかと思った。

5泊6日の日程中、最も記憶に残ることは、高橋智美という女学生の家庭を訪問したことである。外国人の家庭とは思えないくらい負担感なしに過ごし、彼女の家族と気楽に対話した。今までの先入観と違って人情と温かさを感じたのである。

帰って来るとき思ったことは、民族感情ぬきにふれ合えば良い国だし、また、この国から習わなければならない点が多くあると考えた。異国と感じなかったことから推察すると、様々な面で我々と近いし、かつ似ている国である。

私は今度の夏休みの日本研修を通じて良い経験をし、それによって得た良い印象は記憶に残るであろう。最後に、その確実な経験と自覚のため、もし機会が与えられるならば、もう一度行って見たいと思うのである。

（アジア太平洋博覧会会場にて）

大田大学校研修団日程表

月　　日	行　　程
7月5日(水)	日本に入国（ソウル－熊本） 歓迎夕食会
7月6日(木)	学長表敬訪問　特別講義受講 熊本市内見学（水前寺公園等数箇所）
7月7日(金)	熊本放送見学　県知事表敬訪問 学生との交流会
7月8日(土)	アジア太平洋博覧会見学
7月9日(日)	自由行動
7月10日(月)	送別会 テクノポリスセンター見学 日本を出国（熊本－ソウル）

交換教授姉妹校滞在印象記

熊本商科大学・熊本短期大学滞在印象記

大田大学校教授
金　麟　濟

韓国と日本はほんとうに近い国です。特に九州は釜山から飛行機で三十分の距離です。こんなに近い隣国でありながらも両方とも相手の国をよくわからない状況です。日本の研究機関で行った対韓意識調査とか、韓国の言論機関で行った対日意識調査の結果を見ると両方ともあまりにも偏見的で自己中心的な意識をもっているのに驚かざるをえません。ヨーロッパのフランス人がドイツ人に対して一番親しみを感じるとのアンケート例とくらべて見るとき、本当に残念な気がします。

しかし両国民相互の不理解は一朝一夕に解決できる問題ではなく、より深い両国民の交流によってのみ（解決が）可能であると思います。

このような難しい問題を前において、熊本商科大学と短期大学が学問と文化の国際交流のために果たして来た役割は、両国民の友好を結ぶ民間外交の輝かしい業績と思います。おかげさまで一番大きな恵みをうけたのが大田大学校であり、又私自身だと考えております。私は交換教員として来る前に４度日本を訪ねることがありました。しかしそれは走馬看山をしたにすぎませんでした。今度の１学期間の日本滞在を通じて私は日本に関する多くのことを学びました。そして日本に対する理解と親しみを感じるようになりました。

日本に対する印象を一言でいえば、日本の驚くほどの経済力と国際化した文化と国民の国際意識はうらやましい気がしました。このような巨大な力の源がどこにあるか考えてみました。それは日本国民の正直さ・団結力・勤勉性・親切さにあると考えました。

熊本商大と短期大学の雰囲気も自由と活気がありながらも責任感と協力心が強いのを意識しました。それはいろいろの行事（落成式・歓迎会・送別会等）を通じて現れる計画の緻密性と完結性、施設建立募金の順調なる進行、教職員の勤務時間外の特勤態度、又教授会を中心とする民主的で衆智をあつめる大学の運営方式等は大学の行政に経験のある私としては大きな勉強になりました。

学生達の授業態度と学科試験における態度は私に大きな感銘を与えてくれました。又学生たちは就職のための勉強だけでなく、自由なサークル活動を通じて自由人としての個性と創意性の伸張をはかる課外活動も印象的でした。西洋の学問と技術を重視しながらも日本の伝統的思想と文化を守りながら独創的文化を作って行く根本的力は大学より出ると考える時、日本の大学教育の健全性にうらやましさを感じました。

特に九州の自然はあまりにも雄大で美麗でした。阿蘇山と桜島の活火山と雲仙温泉と高千穂を見ることができたのは忘れられない感動的な想い出になると思っております。

終わりに私の熊本商大及び短大滞在中、身

に余る御好意をいただいた先生と職員の皆様に厚く御礼を申し上げながら擱筆致します。

（原文：日本語）

熊本滞在印象記

深圳大学特区経済研究所副所長
王　暁　敏

私は深圳大学と熊本商科大学・短期大学との第一回交換教員として、今年一月、熊本へ来ました。

そして国際交流室の皆様から真心のこもったおもてなしをしていただいております。

熊本商大・短大は私のために大変すばらしい住居と生活条件を準備くださったばかりか、完備した教学・研究環境を提供してくださいました。

私の研究テーマは“日本的経営管理”ですから、関係の文献を読んだり、資料を調べたりするほかに、若干の工場や企業の見学もしております。また私は何人かの先生の講義も受講しております。また日本の学生を理解するため高遊原での学生たちのゼミ合宿にも二回ほど参加しました。私はその中で、商大の先生方の学識の豊富なことや、その教授方法の素晴らしさを知りました。特に講義中の自由討論の雰囲気を強く感じました。学生たちは勉強ばかりでなく、色んな体育・文芸・社会活動など広範囲に参加しており、体をきたえ、知識を高めながら、お互いの理解を深め、自分の人生を豊かにしております。

私は色々と交流を深める中で、商大・短大の学長を始め、指導者の度量の大きさ、視野の広さを痛感しました。現在の国際化の潮流の中で、世界各国と広範な交流をおし進め、アメリカ、中国、韓国の十余の大学と姉妹校関係を結んでおります。教員・留学生の交換を行うとともに、毎年、多くの学生を海外研修に派遣しております。そして21世紀に向けての国際的人材育成のための諸条件を整備しているのです。

さて、熊本は九州・日本の南方に位置し、気候温暖にして人情味あふれるところです。

多くの人々が私に親切にお世話し協力してくれます。お盆休みには私は彼らと一緒に酒を飲みに行き、“ぼした祭”ではその伝統的なお祭行事を見学しました。また夏休みには、数人の先生方と天草や本渡市等に行き、泳いだり魚釣りをしたりしました。紺碧の有明海で心ゆくまで遊び、波静かな海岸に坐って釣糸をたらしている時、私は生活の中の楽しみをしみじみと感じました。

熊本の風景はとても美しく、環境もまたとてもすばらしいです。古くて雄大な熊本城、変化に富んだ流水、緑の若草でむしろを敷いたような水前寺公園、噴火してやまない阿蘇山、広々とした草千里、どれもが私にすばらしい印象を与えてくれました。

しかし、私に最も大きく深い印象を与えたものは、やはり日本の何処もが清潔で、整然としており、人もまた大変礼儀正しく、各人が各々の社会秩序を進んで守っていることです。一九八二年、私の義母は中国対外貿易訪日代表団の一員として、二週間日本に滞在したことがあります。義母は帰国するや、日本人の清潔さ、礼儀正しさを絶賛しはじめたのです。今回、私自身が日本に来てみて、その事をもっともっと実感できたのです。特に日

本人のお互いに相手を尊重し、理解しあおうという態度、たとえお互いに意見の相違があったとしても、何んとかして対立を避けよう、小異を捨て大同を求めようとする態度、もっと言えば、日本人の哲学は競争プラス協力の哲学であることを実感しました。

日本の戦後経済の著しい発展とその社会の安定は、国民全体のこのような態度と精神とが大いに関係あるのではないかと思います。

私は中国人が日本に学ぶとすれば、日本の科学技術、工芸、設備の導入や所謂、日本的経営管理の方法を学ぶだけでなく、日本人の勤勉さと相互に団結協力する精神こそ学ぶべきと思います。それこそが中国の発展を一層速め、且つ調和のとれたものにするであろうと思っています。

（原文：中国語　邦訳：永末嘉孝教授）

交換留学生本学滞在印象記

日本印象記

深圳大学国際金融学科４年
仰　英　姿

中国では“光陰矢の如し”という諺がある。私の今の気持ちはまったくその通りである。あと２ヶ月ぐらいで、私の留学生活が終わるから。日本に来て初めて一人で人生を考え、異国文化と異なる政治制度、経済システム、異なる人生観、価値観から人間の交際方式に直面したことは私の人生にとって、とても意義深いことだと思う。

日本は第２次世界大戦によって、廃墟になったと言ってもいい。しかし、日本がその廃墟から立直り、世界有数の経済大国になった。この成功は世界各国を驚かせ、目を見張らせている。日本の経済的な成功は伝統的国民性、つまり勤勉で忍耐力が強いなど昔ながらの美徳によるものだけではなく、日本独特の組織力、政策、計画、及び集団としての知識への追求によってもたらされたものであると思う。

かの有名な中国の作家魯迅は「拿来主義」という文章を書いたことがある。所謂「拿来主義」とは他人のいいものを導入するということである。拿来主義には二つのタイプがあり、つまり純粋な拿来主義と利口な拿来主義に分かれている。前者は他人のものをそのまま取り入れるだけのものであり、後者は自分の特徴を配慮しながら、他人のものを自分のものにするのである。日本はその利口な拿来主義の典型的モデルだと言えよう。たとえば、日本語の発展や戦後の各分野における技術の発展、特に日本を取り巻く情勢を考えながら、外国の一番いいものを選び、さらにそれを改造して日本人民が納得できる日本文化の一部にしてきた。こういう事から見ても日本はなかなか優秀な国ではないかと思う。

しかしながら、日本は外国のものを取り入れると同時にけっして自国の伝統文化を見捨てない。京都、奈良ではあたかも博物館に身を置いているような感じがした。日本の歴史

を辿りながら、外国人はもちろんのこと、日本人でさえも、さすが日本だなと感心するだろうと私は思う。確かに、そのすべての物から和風を感じることができる。その他、日本の庭園、お寺、花道、茶道、民謡、さまざまなおもしろい行事からも日本の心と姿をとらえる事ができる。

私の商大での毎日はとても充実している。またいろんな授業に出たり、いろんな日本人と接したり、いろんなことを経験したり、新しいことを発見したりして、自分が生の日本を体験していると実感している。自然を大切にする日本の芸術、合理的経営秩序を大切にする日本の法律、そして家庭と職場の間を忙しく走り回っている日本人、パチンコを楽しんでいる日本人、お酒を飲みながらカラオケを歌っている日本人、本音と建前のある日本人、先輩と後輩、上司と部下の格がはっきりしている階層社会で生活している日本人、政治、経済など社会生活での根回しを行う日本、日本社会は実におもしろいものではないか。

（原文：日本語）

「私が感じた日本の国際化」

深圳大学経済学科４年
羅　　鋼

月日がたつのは早いですね。日本に来てもうすぐ一年近くになります。この一年間のことを思い出してみると、熊本商科大学の先生方が私達に親切にしてくれたことに心から感謝しています。熊本の厚い人情、美しい風景、更に美味しい水など本当に名残り惜しいです。

来日以来、いろいろなことを経験しました。特に日本の国際化を感じました。たとえば、熊本商科大学・短期大学は、アメリカの９つの大学と、韓国の大田大学校と、中国の深圳大学と姉妹関係を締結しています。毎年、教員と学生の交換をしています。もちろん資料交換、科学研究協力もしています。私自分自身にとって、今まで、多様な国際交流活動に参加しました。たとえば御船町国際交流会が組織したホームステイ、阿蘇山での熊本女子大の学生との交流活動、第二回「日本語による国際弁論大会」などです。日本ではそのような国際交流活動が常にあります。

一連の国際交流活動を通じて私達外国人は、日本の社会および日本の家庭に入り込んで日本の風俗、習慣、民族性などをよく理解することができます。同時に私達自身の生活内容が豊富になります。更に私達と日本人が相互に深く理解して深い友誼を締結します。

（原文：日本語）

Profile

―― 任相一（イム サン イル）先生 ――

韓国・大田大学校からの第５回交換教授任相一先生が、９月に来学されましたので、ご紹介致します。

高麗大学校大学院経済学研究科にて博士課程を修了され、現在は大田大学校に経済学科の助教授として勤務されておられる若い先生です。前期の金麟濟先生の後を引き継いで、韓国語Ａと韓国語Ｄを、また教職員向けの韓国語会話を半年間担当されます。来日は初めてで、美しい奥様と３才と４才になる二人の可愛いお子さんとご一緒です。

第1回長期交換留学生報告記

充実したアメリカの学生生活

経済学科4年　田　中　久　博

モンタナ州立大学への約一年間の留学、その一年間に、楽しくとも苦しくとも貴重な経験を得ることができた。なぜそれが貴重な経験であったのか考えるとき、一つに充実した学生生活を送ることができたからであるように感じる。

アメリカでの学生生活が始まり、初めから完全にアメリカの学生同様のペースで生活を送っていった。当然、最初は戸惑い、苦しく感じられたが、その間に徐々にアメリカの学生がどのようにして生活を送っているのか理解できるようになった。かれらは学生の本分である勉強を目的意識を持って大変熱心に勉強する。ウィークデーは勉強の毎日なのであるが、ウィークエンドは同じ学生なのかと疑いたくなるほどパーティーを開いて大騒ぎをする。またウィークデーでも時間を決めてスポーツで汗を流したり、映画を見たりと、「けじめ」というものがしっかりとしている。このような学生の生活を自分が理解した頃、ようやく自分でも充実した生活がどういうものかが分かり、そしてその生活を送れるようになったように思う。

英語での講義、テスト、レポート、これらは自分にとっては大変な努力が必要であり、一つも楽なことではなかった。しかしそれが充実した生活の一つになると、苦しさということよりも頑張るぞというやる気が出てきた。一年といわず、卒業するまでアメリカの大学で勉強したいと思ったほどである。アメリカの大学で、学生のあるべき姿を見ることができ、そしてその充実した生活を経験でき、それらは貴重な体験となった。

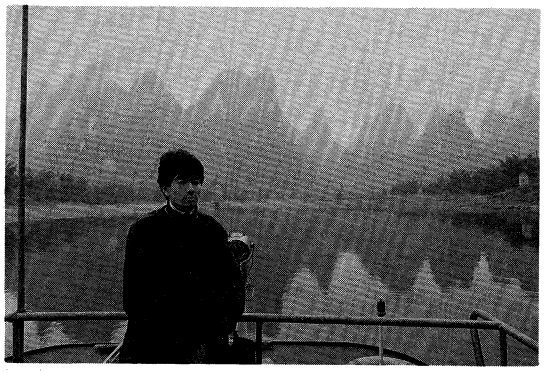
（フードバザーでルームメイトとエチオピアの友達と）

最後に、このようなすばらしい体験の機会を与えて頂いた本学に対し、特に感謝しています。

刺激的だった海外生活

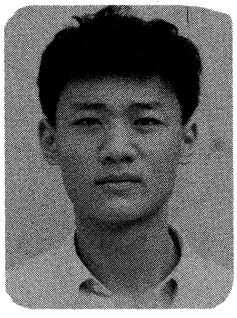
経営学科5年　髙　木　浩　規

現在、私達の周りには様々な情報が溢れて



（桂林で璃江下りを楽しむ高木君）

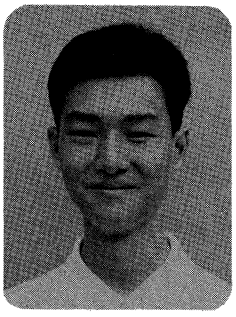
います。外国についての情報も豊富なので日本に居ながらにして世界を知ることも可能ですが、私は、今回の留学を通じて、日頃得た知識を自分の体験から再確認し、新しい発見ができたことに大変意義を感じています。私が日本で描いていた中国の数々のイメージがどんどん実証され、また否定されていく生活は大変刺激的でしたし、違った社会の中で生活している学生や一般の人々と自分とを比べ、共通点、相違点を見つけ、そこにある問題点を自分なりに考えながら生活を送ったことが、将来私が出会うであろう様々な問題な直面した時、大いに参考になると思えます。もし私が実際に行ってそれらの事を体験していなければ、数々の問題に気づくのにもっと時間がかかったことでしょう。日本では国際化が進むにつれ、国際交流が益々盛んになってきていますが、海外での日本の理解度はまだ不充分で、一面では誤解され、また反感も買っている印象を受けました。「同じ日本人と思われるのが恥ずかしい。」とある日本人のぼや



Profile

Liao Dong Ming　　Liu Kai Dong

―― 廖東鳴君と劉凱東君 ――



今年度の中国・深圳大学からの交換留学生が、10月下旬に本学での生活に入りましたので、ご紹介致します。

廖東鳴君は、深圳大学国際金融貿易学部国際金融学科３年生で、劉凱東君は、深圳大学電子学部コンピューター学科４年生。二人とも来年の８月まで１年間本学の経済学部で履修予定。共に国際金融に強い関心を持っており、本学滞在中の研究に意欲を燃やしています。

く声や、「日本人がここの物価をつり上げている。」と現地の人が言う声を聞いた時、心苦しく思うと同時に、私達はこれらの言葉が指す問題についてもっと考えて行動しないと到底友好などありえないと思えました。

普段、日本の中だけで生活している私達にとって、先のような問題に気づく機会はなかなかありません。現在行われている熊本商科大学・短期大学の国際交流プラグラムを通じ、私達学生が国際交流について理解する機会があるということは大変大きな意義があることです。深圳大学の先生がおっしゃっていた「中国と日本は国交回復以前から民間レベルの交流は盛んでした。これからもそれらの交流を通し、両国の友好を深めたいですね。」の言葉通り、今後交流プログラムが益々盛んになっていってもらいたいと思います。

中国留学印象記

経営学科5年　松　山　泰　広

私の中国留学は初めての海外生活でもありました。

日本と中国は距離に関しては遠くはありませんが、民族、風俗、文化、言葉とどれをとっても異なっています。私が今まで抱いていた中国や中国人に対してのイメージと現実のそれとは大きな違いがありました。

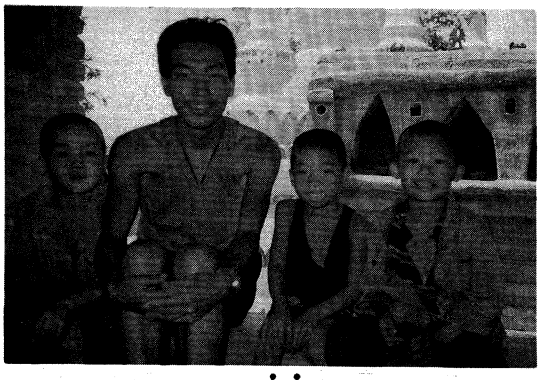
私達は外国に対して情報の表面だけを見聞きして、判断しがちになり、時には誤解や偏見を持ってしまいます。現実に置かれたそれぞれの国や国民の本当の姿をはっきりととらえることは難しいのです。

私には、日本人は「西洋重視、東洋軽視」といった考え方をしているように感じます。自分達の属する民族や国家、宗教を絶対視して他国の文化をとらうようとする優越的なものの考え方では相互理解はできないし、また大変に危険なことであると思います。私達には価値の無いように思われることでも、他の国の人々には価値の大きなものであったりします。

私は異国の文化や人々を理解するには、それらの人々の倫理観や価値観は相対的であり、私達が重んじるそれと同じ価値を持っていると認識しなければならないと思います。また、それは人種、民族（国家）、宗教の差別、偏見を捨て、一人の人間として認め尊重することによって始まるような気がします。

また逆に自国についてはっきりとした認識を持つことも大事なことだと思います。

今まさに「国際化」とか「国際人」とかもてはやされますが、只、外国語が流暢であるとか、海外体験を持つ人達が「真の国際人」とは思えません。まず自国の事、歴史、民族、文化などを知り（尊重し）、相手国のそれらもまた尊重することが基本だと考えます。



（少数民族傣族の子供達と）

熊本商科大学・熊本短期大学留学生会結成

留学生会の発足

留学生会会長
呉　慶　煥

留学生会の役割とは何だろうか？　この問いが生まれた時、留学生会がスタートした。留学生会には、二本の柱がある。一つは、留学生間の団結を図り助け合うこと、そして、もう一つには、熊本学園での国際交流の起爆剤になることである。

今年の５月頃だったろうか。「大学の新入生オリエンテーションの他に、留学生対象のガイダンスの必要があるのでは？」という声が聞かれた。慣れない土地で学生生活の第一歩を踏み出す留学生には、まず日本の生活状況が把握できにくい。この第一関門を突破するため、先輩の留学生がなんらかの手助けをしてやろう。そのためには、各留学生がばらばらの状態ではなにもできない。また、日本は世界に名高い経済大国である。このため、円高及び物価高は他の国の比ではない。新聞・テレビなどで東京における留学生の死が報じられた。死には至らないまでも、勉学より日々の糧をえるため苦労している留学生は、この熊本においてさえも数多い。このような経済的な苦痛の声を取り上げるためにも、一つのまとまった組織が必要であるということから、留学生会を結成するにいたった。

いま一つの柱である国際交流の起爆剤としての組織とは、熊本学園における留学生の立場を考える時、最も重要である。今、世界各国において国際化が叫ばれている。世界は運命共同体であると言われている。運命共同体である以上、異文化を理解し、昔から残る偏見と先入観を取り除くことが必要である。他の人間を自己と対等のものとして認めることが必要である。日本で生活する留学生の中には、表面だけのニッポンしかとらえることができず、誤解したまま帰国する学生が少なくない。また、日本人学生も在学期間中一度も留学生と言葉を交わすことなく、さらにはその存在さえ知らなかったという学生もいる。海外旅行をし、外国語を習うことだけが国際人への道ではないはずだ。身近にいる外国人学生から得られる知識も多い。そして、自己の勉学のための留学は勿論、より多くの人々に自国を理解してもらうことも、留学生としての役割である。

以上のようなことを柱に、留学生会は発足し、これから熊本学園の中で、また熊本という地域社会の中で活動してゆく予定である。スポーツを通しての学生との交流、託麻祭への参加、また、インターナショナルパーティーの計画も構想中だ。外国人留学生だけではなく、日本人学生の協力もお願いしたい。九州で国際交流を最も活発に展開している熊本学園の留学生会の役割は重大である。

留学生会の目的

留学生との親睦を図ると共に学術活動をより活発に行い、日本の人との様々な交流を通じて日本を知り、さらに自分の国の色々なことを日本の学生に理解してもらうことを目的とする。

留学生会の内容

ア　各分野の学術活動をより活発に行う。

イ　日本の人とのより深い相互理解を求める為に各種の交流、例えば、スポーツ、ホームスティ等に積極的に参加する。

ウ　学内の各クラブとの交流を通じて親睦を図る。

エ　熊本県内、多数の大学の学生と留学生との交流を促進する。

オ　１年毎のイベント等、例えば文化祭、クリスマス等の行事を積極的に遂行する。

カ　熊本商科大学・熊本短期大学内の留学生の交流を通じて、お互いの文化を知りより深い親睦を図る。

以上の事項は全て、熊本商科大学・熊本短期大学の発展と共に、留学生会の発展のために実践する。

平成元年度　留学生会役員名簿

顧　問	高瀬泰之	相談役	教務課長
	柏野健三		学務課長
			国際交流係長
会　長	呉　慶　煥	幹　事	黄　踊　鴻
副会長	陳　亮　宏		孫　躍　東
企　画	林　倩　穂		金　正　翰
会　計	劉　　沖		原田みちスエリ

1989年度　留学生会予定表

〔主な行事〕

1．学園通信平成元年10月号より平成２年３月号まで、留学生紹介（日本の生活の中で感じたことを紹介する）の記事を掲載

2．熊本県内の留学生会役員との懇談会を、３ヵ月毎に開催する（場合により、会員の参加も可能とする）

3．熊本商科大学・熊本短期大学の学生サークル（サークル連合への加盟、不加盟にかかわらず、学園内のすべてのサークルについて）との交流を深めるために、スポーツ、学術交流や懇談会を１ヵ月に１度の割合で定期的に行う）

4．２ヵ月に１度の割合で、教員との交流を深めるために講演会を開く

5．九州内の留学生会役員との懇談会を、１年に１度開く

6．託麻祭の準備をする

〔９月の予定〕

中旬――臨時総会

・学園通信10月号掲載用留学生紹介文の執筆者を決める

・講演会を依頼する教授を決める

・留学生会の会費を収める

・学内サークルとの交流の順番を決める

・留学生会の結束のための懇談会とスポーツ交流について検討する

・託麻祭について活動内容を協議する

・学生課担当者に留学生会の活動に対する援助について説明をお願いする（託麻祭の活動に対する援助等）

〔10月の予定〕

中旬――熊本県内の留学生会役員との交流会開催

――役員会を開いて、託麻祭の活動について詳細を検討する

〔11月の予定〕

初旬――託麻祭の準備

〔12月の予定〕

冬休み――交流を目的とした合宿を、高遊原研修所において行う予定

〔1月～3月〕

新学期の活動内容の検討と、決算、また新入留学生を迎える準備をする

（託麻祭へのバザー出店　11月4日・右端：呉会長）

留学生対象奨学金の枠拡大

熊本短期大学教授　柏　野　健　三

外国人留学生のために本学の国際交流室が窓口となっている奨学金が二種類あります。即ち、「熊本県外国人留学生奨学金」と「在熊外国人留学生ライオンズクラブ奨学金」です。

県奨学金の場合、本年度は5名が推薦され、全員奨学生に決定しました。県奨学金は20名に、月額3万円（年間36万円）が支給されます。対象は大学院、大学、短期大学に在学する私費留学生です。応募者は以下の四条件を満たす必要があります。即ち、①熊本県内の市町村に外国人登録をしている者、②日本国政府、外国政府及び地方公共団体のいずれからも、奨学金若しくはこれに類するものの交付を受けていない者、③修学期間が一年以上の見込みの者、④学業、人物が優秀で、在籍する大学の長の推薦がある者となっています。受給者は、年度末に学業研究報告書を、県に提出する義務があります。この奨学金制度の目的は「県内在住の外国人留学生と県民との交流を促進するための一助」となることです。

一方ライオンズ奨学金は在熊外国人留学生奨学会事業の一部門として実施されています。この事業の目的は「在熊外国人留学生に対し、ライオンズクラブ国際協会の目的をふまえ、物心両面の援助の手を差しのべ、もって相互理解の精神をつちかうこと」となっています。本年度（1989年7月から1990年6月まで）の場合、年額12万円が支給されます。本学に対し、5名の推薦依頼があり、5名を推薦した結果、3名が支給されることになりました。

SEMINARS

国際交流室主催：　交換教員による教職員向け語学教室

1．英語会話クラス

講師　クリフ・モンテイン先生（米国・モンタナ州立大学）

a．初級コース

開催日　10月11日より毎週水曜日
時　間　17：10～18：10
場　所　研究棟5階小会議室
受講者　15人

b．中級コース

開催日　10月9日より毎週月曜日
時　間　16：30～18：00
場　所　モンテイン先生の研究室
受講者　5人

c．上級コース

開催日　10月3日より毎週火曜日
時　間　16：20～17：50
場　所　モンテイン先生の研究室
受講者　6人

d．平成2年度長期・短期派遣留学生向け英語会話特別講座

開催日　11月22日より毎週水曜日と木曜日
時　間　水曜日　13：00～14：30　木曜日　16：30～18：00
場　所　モンテイン先生の研究室
受講者　5人

2．韓国語会話クラス

講師　任相一先生（韓国・大田大学校）
開催日　10月12日より毎週木曜日
時　間　17：10～18：10
場　所　研究棟5階小会議室
受講者　8人

3．中国語会話クラス

講師　王暁敏先生（中国・深圳大学）
開催日　4月27日より毎週木曜日
時　間　17：10～18：10
場　所　研究棟4階小会議室
受講者　4人

海外研主催：　特別集中講義（２回シリーズ）

テーマ　第１回：韓国の大学制度
　　第２回：韓国の文化―日本との比較―

講　師　金麟濟先生（交換教授）

日　時　第１回　７月12日（水）16：10～17：30
　　第２回　７月26日（水）16：10～17：30

場　所　本館４階　第１会議室

参加者　第１回　学生４名、教職員17名
　　第２回　学生３名、教職員11名

海外研主催：　講演会

１．テーマ　ヨーロッパから見た日本

講　師　ヨーゼフ・クライナー氏（ドイツ日本研究所長）

日　時　７月13日（木）13：00～14：40

場　所　445教室

参加者　約300名

２．テーマ　異文化の女性学～アメリカから見た“卑弥呼”旋風～

講　師　ムルハーン・千栄子氏（イリノイ大学教授）

日　時　10月30日（月）17：00～18：30

場　所　本館４階第２会議室

参加者　約80名

海外研主催：　教育シンポジウム

１．テーマ　国際化と教育

基調報告者　蒲島郁夫氏

パネラー　花吉洋一氏
　　高木文堂氏
　　岩野茂道氏

司　会　落合俊行氏

日　時　11月24日（金）14：00～17：00

場　所　本館４階第２会議室

参加者　約80名

国際交流セミナー

（主催：熊本商科大学　熊本大学　くまもと科学・技術振興クラブ）

講　師　クリフ・モンテイン教授（モンタナ州立大・熊本商大交換教授）
　　ウイリアム・シェルナット教授（ノースカロライナ大）

日　時　12月14日（木）13：00～17：00

場　所　県立劇場大会議室

平成元年度　留学生名簿

正規生

No.	氏名	性別	国籍	学部・学科・年・組
1	孫　永　紅	女	中国	商大・商学部・商学科・1年1組
2	劉　沖	男	中国	商大・商学部・経営学科・1年1組
3	黄　啓　光	男	台湾	商大・商学部・経営学科・1年1組
4	孫　躍　東	男	中国	商大・商学部・経営学科・1年2組
5	林　倩　穂	女	台湾	商大・経済学部・経済学科・2年3組
6	張　琍　姫	女	中国	商大・商学部・商学科・3年4組
7	金　正　翰	男	韓国	商大・商学部・経営学科・3年1組
8	楊　国　華	男	マレーシア	商大・商学部・経営学科・3年1組
9	周　佩　文	女	台湾	商大・商学部・経営学科・3年3組
10	陳　亮　宏	男	台湾	商大・経済学部・経済学科・3年2組
11	韓　相　姫	女	韓国	短大・教養科・2年2組

研究生

1	陳　宝　剛	男	中国	商大・商学部・商学科
2	原田　みち　スエリ	女	ブラジル	商大・商学部・商学科
3	徐　成　華	男	中国	商大・商学部・商学科
4	鄭　凱　希	男	中国	商大・商学部・商学科
5	蘇　愛　民	男	中国	商大・商学部・経営学科
6	温　雪　垠	女	中国	商大・商学部・経営学科
7	譚　先　富	男	中国	商大・商学部・経営学科
8	高群　ホセ　ルイス	男	ペルー	商大・商学部・経営学科
9	楊　兆　利	男	中国	商大・商学部・経営学科
10	姚　耘	男	中国	商大・商学部・経営学科
11	竹馬ジョイスよし	女	アメリカ	短大・社会科
12	江　源	男	中国	短大・教養科

大学院生

1	黄　踊　鴻	男	中国	商大大学院・商科研究科・修士課程
2	呉　慶　煥	男	韓国	商大大学院・商学研究科・修士課程
3	劉　錦　銘	男	台湾	商大大学院・商学研究科・修士課程

交換留学生

1	羅　鋼	男	中国	商大・商学部・商学科
2	仰　英　姿	女	中国	商大・経済学部・経済学科
3	廖　東　鳴	男	中国	商大・経済学部・経済学科
4	劉　凱　東	男	中国	商大・経済学部・経済学科

1989年後期　国際交流ＥＶＥＮＴＳ

日付	モンタナ	大田	深圳	その他
8月9日		宮崎俊策先生(交換教授)帰国		
23日		金麟濟先生(交換教授)帰国		
9月16日	クリフ・モンテイン先生(交換教授)　来熊			
27日		任相一先生(交換教授)来熊		
10月3日				サンアントニオＩＷＣ大学学長来学
8日				姉妹大学調査（マレーシア・オーストラリア）出発
13日				福岡アメリカンセンター館長来学
15日				姉妹大学調査（マレーシア・オーストラリア）帰国
27日			廖東鳴君・劉凱東君(長期交換留学生)来熊	
30日				イリノイ大学ムルハーン・千栄子教授来学
11月2日				韓国女子大生一行来学
3～5日				本学留学生会・文化祭（託麻祭）参加

国際交流委員会メンバー

◎清野　健・古田龍助・勝部伸夫・山内良一
笹山　茂・永末嘉孝・林日出男・柏野健三
原口行雄・星子三郎・西村禮二・喜佐田知子
（◎は委員長）

〒862　熊本市大江２丁目５番１号
熊本商科大学
熊本短期大学
ＴＥＬ(096)364－5161